

# 愛撫

梶井基次郎



猫の耳というものはまことに可笑おかしなものである。薄べつたくて、冷たくて、竹の子の皮のように、表には絨毛じゆうもうが生えていて、裏はピカピカしている。硬かたいような、柔らかいような、なんともいえない一種特別の物質である。私は子供のときから、猫の耳というと、一度「切符切り」でパチンとやってみたくて堪たまらなかつた。これは残酷な空想だろうか？

否。まったく猫の耳の持っている一種不可思議な示唆しそ力によるのである。私は、家へ来たある謹厳な客が、膝へあがつて来た仔猫の耳を、話をしながら、しきりに抓つかっていた光景を忘れることができない。

このような疑惑は思いの外に執念深いものである。「切符切り」でパチンとやるといふような、見戯に類した空想も、思い切つて行為に移さない限り、われわれのアンニュイのなかに、

外観上の年齢を遙かにながく生き延びる。とつくに分別のできた大人が、今もなお熱心に——厚紙でサンドウィッチのように挟んだうえから一思いに切つてみたら？ ——こんなことを考えているのである！ ところが、最近、ふとしたことから、この空想の致命的な誤算が曝露ばくろしてしまった。

元来、猫は兎のように耳で吊り下げられても、そう痛がらない。引つ張るということに対しては、猫の耳は奇妙な構造を持っている。というのは、一度引つ張られて破れたような痕跡が、どの猫の耳にもあるのである。その破れた箇所には、また巧妙な補片つぎが当つていて、まったくそれは、創造説を信じる人にとつても進化論を信じる人にとつても、不可思議な、滑稽な耳たるを失わない。そしてその補片つぎが、耳を引つ張られるときの緩めゆるになるにちがいないのである。そんなわけで、耳を引つ張られ

ることに関して、猫はいたって平気だ。それでは、圧迫に対してはどうかという、これも指でつまむくらいでは、いくら強くしても痛がらない。さきほどの客のように爪つねで見たところ、ごく稀まれにしか悲鳴を発しないのである。こんなところから、猫の耳は不死身のような疑いを受け、ひいては「切符切り」の危険にも曝さらされるのであるが、ある日、私は猫と遊んでいる最中に、とうとうその耳を噛かんでしまったのである。これが私の発見だったのである。噛まれるや否や、その下らない奴は、直ちに悲鳴をあげた。私の古い空想はその場で壊こわれてしまった。猫は耳を噛まれるのが一番痛いのである。悲鳴は最も微かすかなところからはじまる。だんだん強くするほど、だんだん強く鳴く。Crescendo のうまく出る——なんだか木管楽器のような気がする。

私のながらくの空想は、かくの如くにして消えてしまった。しかしこういうことにはきりがないと見える。この頃、私はまた別なことを空想しはじめている。

それは、猫の爪をみんな切つてしまうのである。猫はどうなるだろう？ おそらく彼は死んでしまうのではなからうか？

いつものように、彼は木登りをしようとする。——できない。人の裾を目がけて跳びかかる。——異<sup>ちが</sup>う。爪を研<sup>と</sup>ごうとする。

——なんにもない。おそらく彼はこんなことを何度もやってみるにちがいない。そのたびにだんだん今の自分が昔の自分と異うことに気がついてゆく。彼はだんだん自信を失つてゆく。もはや自分がある「高さ」にいるということにさえブルブル慄えずにはいられない。「落下」から常に自分を守つてくれていた爪がもはやないからである。彼はよたよたと歩く別の動物になつ

てしまう。遂にそれさえしなくなる。絶望！　そして絶え間のない恐怖の夢を見ながら、物を食べる元氣さえ失せて、遂には——死んでしまう。

爪のない猫！　こんな、便りたよない、哀れな心持のものがあるうか！　空想を失ってしまった詩人、早発性痴呆ちほうに陥った天才にも似ている！

この空想はいつも私を悲しくする。その全き悲しみのために、この結末の妥当であるかどうかということさえ、私にとっては問題ではなくなってしまう。しかし、はたして、爪を抜かれた猫はどうなるのだろう。眼を抜かれても、髭ひげを抜かれても猫は生きているにちがいない。しかし、柔らかい蹠あしのうちの、鞘のなかに隠された、鉤かぎのように曲った、匕首あいくちのように鋭い爪！　これがこの動物の活力であり、智慧ちえであり、精霊であり、一切である

ことを私は信じて疑わないのである。

ある日私は奇妙な夢を見た。

X——という女の人の私室である。この女の人は平常可愛い猫を飼っていて、私が行くと、抱いていた胸から、いつもそいつを放して寄来すのであるが、いつも私はそれに辟易へきえきするのである。抱きあげて見ると、その仔猫には、いつも微かな香料の匂いがしている。

夢のなかの彼女は、鏡の前で化粧していた。私は新聞かなにかを見ながら、ちらちらその方を眺めていたのであるが、アツと驚きの小さな声をあげた。彼女は、なんと！ 猫の手で顔へおしろい白粉を塗っているのである。私はゾツとした。しかし、なおよく見ていると、それは一種の化粧道具で、ただそれを猫と同じように使っているんだということがわかった。しかしあまりそ

れが不思議なので、私はうしろから尋ねずにはいられなかった。「それなんです？　顔をコスっているもの？」

「これ？」

夫人は微笑とともに振り向いた。そしてそれを私の方へ抛ほうつて寄来した。取りあげて見ると、やはり猫の手なのである。

「いつたい、これ、どうしたの！」

訊ききながら私は、今日はいつもの仔猫がいけないことや、その前足がどうやらその猫のものらしいことを、閃せん光こうのように了解した。

「わかつているじゃないの。これはミュルの前足よ」

彼女の答えは平然としていた。そして、この頃外国でこんなのが流行はやるといので、ミュルで作って見たのだといふのである。あなたが作ったのかと、内心私は彼女の残酷さに舌を巻き

ながら尋ねて見ると、それは大学の医科の小使が作つてくれた  
というのである。私は医科の小使というものが、解剖のあとの  
死体の首を土に埋めて置いて鬮體どくろを作り、学生と秘密の取引を  
するということを知っていたので、非常に嫌な気になった。何  
もそんな奴に頼まなくていいじゃないか。そして女という  
ものの、そんなことにかけての、無神経さや残酷さを、今更さらの  
ように憎み出した。しかしそれが外国で流行はやつていているというこ  
とについては、自分もなにかそんなことを、婦人雑誌か新聞か  
で読んでいたような気がした。――

猫の手の化粧道具！ 私は猫の前足を引つ張つて来て、いつ  
も独り笑いをしながら、その毛並を撫でてやる。彼が顔を洗う  
前足の横側には、毛脚の短い絨氈じゅうたんのような毛が密生していて、  
なるほど人間の化粧道具にもなりそうなのである。しかし私に

はそれが何の役に立とう？ 私はゴロツと仰向きに寝転んで、猫を顔の上へあげて来る。二本の前足を掴んで来て、柔らかいその蹠あしのうらを、一つずつ私の眼蓋まぶたにあてがう。快い猫の重量。温かいその蹠。私の疲れた眼球には、しみじみとした、この世のものでない休息が伝わって来る。

仔猫こよ！ 後生だから、しばらく踏み外はずさないでいろよ。お前はすぐ爪を立てるのだから。



底本：「檸檬・ある心の風景」旺文社文庫、旺文社  
1972（昭和 47）年 12 月 10 日初版発行  
1974（昭和 49）年第 4 刷発行

入力：j.utiyama

校正：高橋美奈子

1999 年 1 月 11 日公開

2005 年 10 月 2 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。